カイロプラクター列伝

保井　志之 D.C.

保井志之D.C.

(3) パーマー・カイロプラクティック大学留学の決意

当時とても評判のいい整骨院だったので、混雑して待合室に患者さんがあふれるようになると、いかに効率よく、スムーズに、速く、大勢の患者さんをこなしていくかということだけに意識が向いてしまい、これでいいのだろうか、という思いも湧いてきました。

私は骨折や脱臼を手で整復していく手技療法に関心を持っていましたが、あいにく腰痛などの慢性疾患に対しては、柔道整復法には、特定の手技療法といえるような技術は存在していませんでした。そのため、マニュアル化されたお決まりの対症療法的な治療法から一歩前進できないかと、中国の手技療法やカイロプラクティックの文献などを読みあさりましたが、当時は文献にも限りがありました。また、手技療法を紹介した写真や図からまねごとのようなこともしてみましたが、ピンとくるものがありませんでした。

その頃は、日本ではカイロプラクティックが入って来て日も浅く、学ぶ環境は整っていませんでした。本格的に学ぼうとするなら、アメリカに渡るしかなかった時代でした。そんなこだわりや悩みをかかえていた時、『マニュピュレーション』という季刊誌で、私と同じ明治東洋医学院系列の鍼灸学校を卒業された上村晃二DCが、米国アイオワ州のパーマー大学を卒業され、ロサンゼルスで開業されているということを知りました。上村DCに手紙を書いて、当時の悩みを伝え、パーマー大学への留学の可能性を相談しました。今のようにITが進んでない時代でしたので手紙が唯一の連絡手段でした。

上村DCは気持ちよく相談に乗ってくださり、パーマー・カイロプラクティック大学から日本人留学生に奨学金が出されるという情報も教えて頂きました。また、紹介頂いた、東京で開業されている脇田重孝DCからも色々なアドバイスを頂き、留学の可能性を着実に確かめていきました。当時、留学中だった川西陽三DCにもお手紙を書いて、色々な情報を教えて頂きました。

資金面など様々な障害があった中でも、一番大きな壁は自分の英語力不足でした。最終的に英語力さえクリアできればというところまでこぎつけて、諸先輩からアドバイスを頂きながら留学を決意することができました。

（次号に続く）